時にはシリーズ第二章

時には勇気の様に・・・

～本当の正義や本当の勇気、そして本当の愛ってあなたが思っている様な、

そんなに見かけは強かったり格好良かったり、

そして美しいモノばかりじゃ無い様な気がします～

著者　斉藤 和彦

ライブハウス

その殆どが十五、六歳のの若者で埋め尽くされている小さなライブハウス。そしてライブハウスの看板には一部アウトサイダー　二部ルシード　ジョイントライブと書かれている。そしてステージ横には大きなスピーカーから激しい音と、そして熱いシャウトが聞こえている。

　ステージの上には、一部演奏のアウトサイダーのメンバー、ドラムを叩く高橋茂樹（１６）、ギターを弾く根本純（１６）ベースを弾く伊藤祐司（１７）、激しく歌う志田勇気（１６）が ボロボロのステージ衣装を身にまとい、その集団に向かって情熱をぶつけていた。しかし若者たちはその激しい音楽に乗って盛り上がっている者も居るが、大体の人は次に登場する今巷に人気があるビジュアル系のバンド（ルシード）の為に来ている様で、その喧しい音楽が耳障りにすら感じている者が殆どだった。そして曲の合間に勇気はそのしらけている観客に向かって言った。

勇気　「お前らはちゃんと生きているのか？　その人を見下した目で一体何を見ているんだ！　きっと何も見えてはいないんだろ」

　観客は勇気のそのセリフに一斉に反応した。

観客　「引っ込め！　誰もお前らなんて見に来てねえんだ！　早くルシードを出せ！お前らパンク系バンドは引っ込め！」

　そして何処からか空き缶が勇気の顔に目掛けて飛んできた。

勇気　「この野郎・・・」

　しかし言葉はその先は無かった。勇気は怒りを堪えて、そしてお辞儀をした。

勇気　「本当に今日は僕たちの歌を聴いて頂いてどうもありがとうございました」

　そして観客はヤジとゴミを投げつけた。けれど勇気はそれでも深くお辞儀をして退場した。そしてその後にルシードのメンバーが替わって登場すると、ヤジを飛ばしていた観衆は一斉に盛り上がった。

控え室

勇気を始め、４人は何とも言えない表情で置かれたパイプ椅子に腰掛けた。

祐司　「でもよく堪えたな勇気。俺はてっきりいつもの様に観客殴りつけるのかと思って冷や冷やしたよ」

勇気　「ああ、本当だったらそうしていたかもしれない。けど俺達ここを出入り禁止にされたらもう歌う場所が無くなっちまうだろ。だからそれだけは避けたかったから」

純　「出入り禁止どころか鑑別行きよ。まったくホント勇気のせいで俺達三箇所もライブハウス出入り禁止になっちまうし、巷では音楽性の無いただの暴力バンドだなんてレッテル張られちまうし、ホント勇気と組んだお陰でこっちは散々だよ」

勇気　「・・・」

祐司　「純もそんなに言うことないだろ。確かに勇気はやりすぎる所もあるかもしれないが、勇気が作る歌は最高だぜ。それはお前にも分かるだろ」

純　「それはそうかもしれないけど、だったら何でこんなに人気が出ないんだ。今回だってルシードとジョイントだからチケット売りさばけたけれど、単独ライブじゃ完全に赤字だよ。やっぱさっき観客が言っていた様に、もう自由とか反抗とかそう言うのは流行らないんだよ。それに今日は何の為にライブしたんだよ。一週間後なんだぜ、ヤングバンドフェスティバルは、その予行練習の為にやったのに。俺達プロに成りたくて組んだバンドなんだからそこで結果出せなきゃやっている意味は無くなってしまうんだ。なあシゲ、お前もそう思うだろ」

茂樹　「僕は別に・・・」

純　「とにかく俺はもし今度のフェスティバルで結果を出せない様だったら辞めるよ。幾らだって他に行くところはあるんだからな」

純は帰り支度を済ませとっとと控え室を出て行った。

祐司　「勇気、余り気にするなよ。純のいつもの悪い癖だから」

勇気は黙り込んだままだった。

祐司　「まあ流行らないのかもしれないが、少なくとも俺達のライブを見に来ている奴もいるんだから頑張ってみようぜ」

　祐司は勇気の肩を叩き茂樹と帰り支度を始めた。 そして帰り支度が終わる頃勇気がポツンと呟いた。

勇気　「俺は・・、俺は例えそれが時代遅れだとしても、俺にしか出来ない歌を作りたい。そして俺にしか歌えない歌を歌いたいんだ。なあ祐司、俺は間違っているのかな」

　祐司は黙って首を振った。

教室（次の日）

　勇気は窓の外を眺めながら曲の歌詞を考えそしてノートにその歌詞を写していた。教室では担任で英語科の教師村上（４０）が教科書を読みながら教室を歩き廻っている。そして村上は窓の外を眺めていた勇気の前でその足を止めた。

村上　「外になんか見えるのか？　志田。ん、何だこのノートは」

村上は勇気のノートを無造作に取り上げてその内容を声を出して読んだ。

村上　「ん何々・・・。僕は心から君を愛している、例えこの先暗い毎日が僕らを待ち受けていたとしても、僕はこの愛だけは信じていきたい」

勇気　「やめろ！　返せよ！」

村上　「おい志田、そんな反抗的な目をしていいのか？　お前は後が無いんだぞ。煙草で一週間の謹慎、そして暴力沙汰で無期停、今度問題を起こしたら残っているのは退学だけだ。まあ俺はそれでも構わないんだがな」

　勇気は悔しさを堪えながら言う。

勇気　「すみませんでした。もう授業中は書かないですので、そのノートを返して下さい。それは僕にとって大切なモノなんです」

村上　「ダメだ。お前にはもうチャンスはやらん。まあどうしても返して欲しかったら、放課後に焼却炉の中でも探すんだな。分かったらとっとと廊下で立ってろ！　まったくまだ十六、七のくせして何が愛しているだ、何も分かって無いくせして笑わせ

るな。いいか、お前達も学ぶ気の無い奴は俺の授業は受けさせないから、よおく覚えておけ！」

　村上はそう言うと、勇気のノートを教卓に叩き付けた。

校舎の屋上

　勇気は生徒手帳に何か書き込んでいた。そこに恋人の飯田詩織（１６）が現れる。

詩織　「ここに居たんだ。何処に行ったかと思って心配しちゃったよ。授業終わって廊下に立っているかと思って廊下に出たら居ないんだから。でもひどいよね村上先生。志田君の事あんな言い方しなくたって」

　勇気は詩織の声が聞こえないのか真剣な表情のまま夢中で書き込んでいる。

詩織　「やぱり悔しいよね。志田君が怒るのも無理はないと思うよ。ここの学校の先生達は志田君の事を理解してあげようなんて、全然考えてくれないからね」

詩織は心配そうに勇気の手帳を覗き込む。その時勇気は顔を上げて。

勇気　「（わりと明るく）出来た！　はいこれプレゼント」

　勇気は生徒手帳の１ページを破り詩織に渡した。勇気が渡したその１ページには、赤いバラが一輪描かれていた。

詩織　「ありがとう。綺麗なバラの花だね」

勇気　「さっき教室から出てからずっと描いていたんだ。お前にバラの花をプレゼントしたくて」

詩織　「（少しほっとしながら）でも良かった、元気そうで。村上先生にあんな事されてうんと傷付いているかと思って、それにしてもこの赤いバラ上手に書けているね。でも赤い絵の具なんて何処に持っていたの？」

　その時生徒手帳を仕舞おうとした勇気の右手の甲と、そして少し陰に成っていた屋上の吸水塔の壁に幾つもの赤い血が付いているのが目に入った。

勇気　「お前の事をずっと考えていたんだ。覚えているか？　俺が無期停くらった時。あの時俺は本気で学校を辞めようと思っていたんだ。けれど逃げる事だけはやめよう

ねって言ってくれた事。その時決めたんだ嫌な事があっても逃げないで頑張ろうって。だから耐えたんだ」

詩織　「頑張って耐えてたんだね。そうだよね、うんと悔しいのに一生懸命耐えてたんだよね。でも大丈夫だよ、私がいるから。だから悔しさや悲しみは自分一人だけで背負わないで」

勇気は黙っている。詩織は涙を流しながら、勇気のその傷付いた手を優しく両手で包み込んだ。そんな権力に立ち向かう術をまだ知らない幼い二人の上には真っ青な空が何処までも続いていた。

　～僕が流されてしまいそうになった時も　そして挫折してしまいそうになった時も　君は必死に僕の手を握り続けてくれたんだよね　こんな僕の為に・・・・～

職員室

　職員室に授業を終わらせた村上が勇気から没収したノートを読みながら入って来て、自分の机の上にそのノートをバサっと置く。そこにお茶を入れて自分の席に戻ろうとしている、現国の織田正木（３２）が現れる。

織田　「村上先生。何ですかそのノートは？」

村上　「ああこのノートですか、これはうちのクラスの志田が書いた落書きですよ。まあ本人にとっては大切な詩だとでも思って書いている様ですが、所詮高校生が書いた落書きですなこんなものは、とりあえず私の授業中に書いていたんで見せしめに没収してやりましたよ」

織田　「落書きですか・・・。村上先生、もし良かったら私にそのノート見させて頂けないですか？　私は大学の時に詩を少し勉強していたんですよ。だから興味本位でちょっと見てみたいんです」

村上　「ああ構わないですよ。どうせ焼却炉で燃やすだけなんですから」

（放課後）**職員室**

　詩織は部活が終わり次第、テニス部のユニホーム姿のまま、村上から勇気から没

収したノート返してもらう為に、職員室に現れた。しかし村上の席は空席だった。

詩織　「あの済みません。村上先生は何処に居るか分かりますか？」

織田　「ああ村上先生なら、きっと英語科研究室にでも居るんじゃないかな」

詩織　「そうですか。ありがとうございました」

詩織は軽くお辞儀をして職員室を出た。

スタジオ

ドカドカ、ジャカジャカ小さなスタジオの中ではバラバラで複雑な思いが音楽と成って交差している。

祐司　「やめ、やめ。何なんだよ、これは。まったくバラバラじゃねえか」

純　「俺はちゃんと弾いているぜ」

祐司　「ちゃんと弾いていて何でこんなにバラバラなんだよ。こんなんじゃ一週間後のフェスティバルは結果どころか笑いモノだぞ」

純　「それは俺じゃなくて他の奴が悪いんだよ」

祐司　「まあ誰が悪いとかじゃ無くて、とにかく何か変だぞ」

その時勇気が呟く様に言う。

勇気　「ごめん、多分俺が悪いんだ。今日ちょっと学校で色々あって、それでみんなのリズムに上手く乗る事が出来ないんだ」

純　「やっぱり勇気が原因か。けどそんな事で一々貴重な練習無駄にしないでくれよ」

祐司　「バ～カ、純の様に学校がむかつくって理由だけで三日で学校辞めた人間と違って、勇気はナイーブなんだよ。まあ純には一生わかんねえだろうな」

純　「ナイーブねえ・・。でも嫌な事してどうするんだよ。行きたくない学校行ったってしょうがねえんじゃないか。なあ勇気。お前の作る歌にだってあるじゃないか。この校則で縛られた鉄の塀を壊して外に飛び出そう。きっとそこに自由があるはずだからって。だから辞めちまえばいいんだよ。そうすればバンドに対する意識も高まるしな。それよりまさか学校辞める勇気も無いっていうんじゃないだろうな」

勇気　「違うんだ・・・」

純　「何が？」

勇気　「違うんだ。俺はただ・・・。俺はただ負け犬に成りたく無いだけなんだ」

純　「負け犬ってどう言う事だよ！　お前は学校辞めた俺を負け犬と思っているのか？ふざけんなよ。学校を辞めることも出来ずにウジウジ言っているお前に、そんな事言われる筋合いはねえ。お前の方がよっぽど負け犬じゃねえか！」

　純は勇気の胸ぐらを掴もうとした。そこに茂樹が仲裁に入る。

茂樹　「純チャンやめなよ。勇気はそんな意味で言った訳じゃないんだから」

純　「じゃあ勝手にしろ！」

英語科研究室

　詩織は英語科研究室と書かれたドアをノックした。

詩織　「失礼します」

　開かれた扉の中には三つの机があり、その一つに村上が座っていた。

村上　「おっ飯田か。どうした？」

詩織　「あの、今日志田君から取り上げたノートを返して欲しいんですけど」

村上　「志田から取り上げたノート・・・。ああ、あの落書き帳か。しかし何故お前が取りに来たんだ？」

詩織　「志田君が取りに来ても多分返してもらえないんじゃないかと思って」

村上　「良く分かってるじゃないか。そうか志田の奴、だから飯田を使って取り戻そうとしてやがるのか。汚い野郎だ」

詩織　「違うんです。志田君は関係ないんです。私は別に志田君に頼まれて来た訳じゃなくて、自分の意志で来たんです」

村上　「自分の意志で？　（少し頭の中を整理してから）ははん、そう言うことか。飯田、まあ立ち話もなんだから、そこに座りなさい」

　村上はそう言って詩織を空いている席に座らせた。

村上　「なあ飯田。お前はひょっとして志田と付き合っているのか？　色々と書いてあったぞ、あの落書き帳に」

詩織　「えっ」

村上　「なあに隠す事は無いだろう。先生は何でも知っているんだから」

　村上は詩織の体に手を伸ばす。

幸子　「辞めて下さい！　大声出しますよ」

村上　「いいのかな、そんな事言って。あの落書き帳に書いてあった事を公表したら、まあ後の無い志田だから、不純異性交遊なんて発覚したら間違いなく退学だろうな。お前も可愛い顔して随分な事をしていたみたいだし」

詩織　「・・・・」

スタジオからの帰り道

　勇気と茂樹が二人で歩いている。

茂樹　「勇気、さっき純チャンが言っていた事あまり気にしない方がいいよ。純チャンは勇気の事がうらやましいんだよ。自分に出来ない事を必死にやっている勇気の事が、だから」

勇気　「シゲ、分かっているよ」

茂樹　「ならいいんだけど」

勇気　「けどシゲ、俺は純の様には生きられない。学校を辞める事は簡単な事だよ。けど本当の自由ってモノはきっとそんな所には無いような気がするんだ。学校に行きたくないからサボる。学校が嫌いだから辞める。社会がムカつくからフリーターに成る。一体そんな暮らしに自由があるって言うのか？　俺は違うと思っているんだ。きっと自由は何処かにあるモノなんじゃ無くて、自分のこの手で勝ち取るモノなんじゃないのかって俺は思っているんだ」

　勇気はそう言って自分の握り拳を突き出した。

茂樹　「ああ勇気の言っている事は分かるよ。僕もずっと中途半端だったから、昔はどっ

ちかって言うと純チャンの様に嫌いなモノは避けていたよ。けど中学の時に勇気が授業をボイコットしてやったゲリラライブを初めて見たとき何となくそんな自分が間違えだった事に気が付いた気がしたんだ」

勇気　「（懐かしそうに）ゲリラライブか・・。懐かしいな・・・」

茂樹　「ああそうだね。けれど本当に凄かった、勇気のゲリラライブは。あの頃は学校行くのが本当に地獄に感じていたんだ。教師の権限が無法状態だったから次から次へと登校拒否が増えて、それでも頑張って学校来ても殆ど希望なんて無くて、教師に少しでも逆らえば権力を武器に潰されていたんだ。そして僕を含めて誰もが学校に希望なんて無いとあきらめ始めていたそんな時だった、勇気が突然体育館を占拠してライブを決行したのは。生徒はみんな勇気の歌に励まされて、体育館の限られた入り口を教師から必死に守ったんだ。あの時は優等生も劣等生も関係無く、みんなが一つに成って勇気の歌に確かな希望を感じたはずだよ。実際あの日を境に僕らは戦うことを知った、だから勇気はあの時のみんなにとって救世主だったんだ。ホント勇気は僕らの永遠の希望の星だよ。」

勇気　「希望の星か・・。でもシゲ、あれはみんなが一人一人で守った自由だ。俺が希望の星だったらシゲ、お前も先頭きって入り口を守った英雄なんだ」

茂樹　「英雄？」

勇気　「そうだ英雄だ。なあシゲ、この世の中に例え時代を変えられる人や、正義の味方が居たとしてもたった一人じゃ何も出来ないんだ。けれどみんなが一人一人力を合わせれば必ず変わる。俺のこの心の痛みをみんなが理解できればどんな世界でも変えることは出来る。この世の中に特別な人間なんて居ない、俺もお前もそしてみんなも世界を変える事の出来る人間の一人と言うことだけなんだ」

茂樹　「僕も世界を変えることの出来る人間の一人か・・」

勇気　「ああ。（遠くを見つめ）なあシゲ、俺達は一体何処に向かって行いるんだろうか」

茂樹　「う～ん、それは分からないなあ。けど勇気、これだけは分かってる。例えそれが

何処であろうと、この先に何があろうと僕は勇気を信じているよ」

勇気　「シゲ、ありがとうな」

　勇気の照れもなく言うそんな言葉に茂樹の方が少し照れた。そして二人は街角で別れ、別々の道を歩きだした。

純の部屋

　脱ぎ捨てられたままの洋服、食べかけのカップヌードル、そしてやりかけのジグソーパズルと作りかけの車のプラモデル。そんな何もかもが中途半端な部屋の中で純はコードレス電話を持って話をしている。相手はルシードのメンバー太田だった。

純　「ああ分かっているよ。その代わりそれが上手くいったら、約束通り俺をルシードのメンバーにしてくれるんだろうな」

太田　「ああその事は約束しよう。だからしっかり頼んだぞ」

純　「ああ任しておいてくれ」

教室（次の日）

　村上が出席簿を片手に出席を取っている。

村上　「青木」・「はい」「秋山」・「はい」「天野」・「はい」

村上　「飯田」

　返事は無い。もう一度村上は呼ぶ。

村上　「飯田！　（空席を確認して）ちぇっ休みか」

　村上は意味ありげに勇気の顔を見て、そして微笑んでから次の名前を呼んだ。

村上　「大木」・「はい」・・・・・・・

　勇気は村上の微笑みの意味も分からずに、斜め前にポツンと取り残された詩織の席を見つめていた。

詩織の家の前

　学校帰りに勇気は詩織の家に寄った。そしてインターホンを押した。しばらくし

て詩織の母雅子（４０）の声が、インターホン越しからノイズの入った電子音と共に聞こえてきた。

雅子　「はい、どちら様ですか？」

勇気　「あっ、あのう僕は詩織さんのクラスメートの志田と言いますが、詩織さん今日学校を休んだのでお見舞いに来たのですが」

雅子　「そうですか、志田君ですね。ちょっと待っててもらえるかな。今詩織に聞いて来るから」

　雅子はそう言い残しインターホンを一旦切った。

詩織の部屋の前

　雅子は二階にある詩織の部屋のドアをノックした。しかし中からは返事は無い。雅子は諦めるように階段を下りて、玄関のドアを開けた。そこには何度か詩織の部屋の写真立てで見かけた勇気が立っていた。

雅子　「ごめんね。大した事ないんだけど、ちょっと病気の顔を見られたくないから、だからもう少し元気になってから会いたいんだって。せっかく来てもらったのに悪いわね」

勇気　「いえ、僕は構わないです。ただ昨日まで元気だったから、ちょっと心配で。でも大した事無くて良かったです。あっそれじゃこれ渡して貰えますか？　今日の授業をとったノートです」

　勇気は鞄から自分のノートを取り出して雅子に渡した。

勇気　「それじゃ、僕はこれで失礼します。詩織さんによろしく伝えて置いて下さい」

　勇気はお辞儀をしてその場を去る。勇気の後ろ姿はどことなく寂しさがあった。

詩織の部屋

　雅子がノートを持って入ってくる。

雅子　「あなたにこれをだって、彼が志田君ね。随分しっかりしたいい子ね。お母さん好きだな、ああいう素直な子。詩織も好きなんでしょ、彼のこと」

詩織は黙っている。そして雅子は詩織の黙っている様子に溜め息をついた。

雅子　「まあいいわ。とりあえずこのノート、ここに置いておくね。お母さん下にいるから何かあったら呼んでね。じゃあね」

雅子はそう言って机の上にノートを置き、部屋から出ていった。詩織はしばらく遠くを眺めていたが、机の上のノートに手を伸ばしそのページを一枚一枚めくった。書かれている事は今日の授業の内容だったが、ページの終わりに数行違った内容があった。そこにはこう書かれていた。

〔俺は今日ずっとお前を捜していた。けれどお前は何処にも居なかった。授業を抜け出し屋上で空を眺めていたが、やっぱりお前は現れない。二人分のパンを買っても一口も口に出来ない。物理の授業で井上が冗談を言ってみんなは笑っていたけど、俺は笑えなかった。笑えなかった・・・・〕

詩織は黙ったままそのノートをギュッと抱き締めた。そして詩織の肩は小さく震えていた。

織田の家

部屋の時計は夜十一時を廻っていた。織田は村上から預かった勇気のノートを見ながら、何かを待っている様子で右手の指をテーブルにコツコツ鳴らしていた。そこに待ってましたと言わんばかりに電話が鳴った。織田は慌てるように受話器を取った。電話の主は織田の大学の時の同級生片山浩二（３２）だった。

織田　「ああ片山か、悪かったな忙しい所」

片山　「それは構わないが、久しぶりだな。大学生の頃はしょっちゅう会ってたのにな」

織田　「ああ、やっぱりお互い仕事持つと色々忙しく成るからな。それより昨日ＦＡＸ流して置いたけれど見てくれたか？」

片山　「ああこれな」

片山は織田から送られたＦＡＸの束を手に取った。

織田　「どう思う？」

片山　「どう思うって、散文詩か・・」

織田　「俺は大学の時にちょこっと研究しただけだから、いまだに詩にたちさわっているプロの作詞家としてのお前の意見を聞きたくて」

片山　「う～ん、そうだな、まだちゃんと読んだ訳じゃないからハッキリした事は言えないが、かなり興味深い詩だな。確かに荒削りの部分もあるけれど、しっかりした自分の世界観もあるし、インスピレーションの高まるメッセージ性もある。特にこの７枚目の」

～悲しみは一体何処から来るのだろう　心の傷の癒し方も知らない僕はいつだって考えてしまう　いつからか僕の心は痛みの中にあった　聞こえて来る音楽　窓の隙間から零れる光りでさえ僕の心を傷つける　もはやナイフで傷つける痛みなどその比では無かった　ああ全ては僕のせいなのだろう　真実なんて求めなければこんな痛みを感じないで済んだのかもしれない　なあそこのお前達　分かってくれとは言わないけれど　これは俺の弱音なんかじゃないんだ　もしお前達が俺と一緒に真実を求めて行くのならきっと分かることなんだ　ああ俺は一体何処に行こうとしているのか　痛い・一体・・痛い・・・一体・・・・僕の心が痛い・・・・けれどもう少しさ　もう少し行けばきっと辿り着けるはず　僕らが求めるそのパーフェクトワールドに　Yuuki Sida～

片山　「これはテクニックこそ無いが、まさに十代の感受性の強い頃にしか書けないストレートな詩だろう。そしてこの中には強さと弱さが混ざり合った葛藤が上手く表現されている。それに十二枚目の真ん中にある一行」

～僕の願い事なんていつだって　たったひとつなのに・・・・～

片山　「一見分かりにくいが、これだって立派な一行詩だ。それもかなり奥深い。これはなかなか書けないぜ」

織田　「やっぱりお前に見てもらって良かったよ。俺もそれは感じた。ああホントあの頃こんな詩が書けたら今頃俺も」

片山　「まあこればっかりは才能だからな。あの頃必死に愛読したランボーや中原中也の詩はやっぱり俺には書けなかったから、だから俺だって詩だけでは食って行けずに半分音楽事務所で働かなくちゃならないんだ」

織田　「まあな、こればっかりはテストで百点取るのとは訳が違うからな。所で率直に聞くけど、どう思う？　才能はありそうか」

片山　「まあこれだけでは何とも言えないが、少なくともセンスはある。きっと詩的表現方法をもう少し学べば近代詩を変える詩が生まれるかもしれないな」

織田　「そうか、プロのお前が言うんだから間違いないな。それを聞いて俺も本人にその事を伝える事が出来そうだ」

片山　「ただ」

織田　「えっ」

片山　「ただ一つだけ気になるんだが、これを書いた奴は一体何処に向かっているんだ」

織田　「何処って？」

片山　「ん、いや、俺の勘違いならいいのだけれど、この殆どの詩が何処かに向かっている様な気がしてな」

織田　「と言うと現実逃避か？」

片山　「まあ詩人なら誰もがそこに向かう傾向があるが、彼は逆に現実逃避から逃れようとしている様に感じるんだ。特に文体からすると感受性が強すぎる為に何となく・・・。まあとにかく出来れば他の詩も見てみたい。もし可能なら是非彼に頼んで置いてくれ」

織田　「ああ、分かった。とにかく彼に話してみるよ。そうすれば彼にとってもきっと色んな意味で励みにも成るかもしれないからな。本当に今日はありがとうな」

片山　「ああ、今度たまにはまた飲みにでも行こうな。じゃあ」

織田は電話を切った。そしてテーブルの上に置かれたノートを見つめた。

教室（次の日）

現代国語の時間、織田は授業で自由詩を生徒達に書かせていた。

織田　「まあテーマは何でもいいからな。それと特に自由詩だから形式ばることもないぞ。とにかくテーマも形式も自由でいいから、自分の思った通り書いて見ろ」

織田は周りを見渡しながらも、やはり勇気が気になり、自然と視線は勇気に向く。けれど勇気は特に書く気配もなく、斜め前の空席を見つめたままだった。 時間はどんどん経つ、それでも勇気は書く様子も考えている様子もなくただ空席だけを見つめているだけだった。 織田は気になりながらも教室の壁に掛けられた丸い大きな時計に目をやる。時計はすでに終了十分前の十一時五十分を指していた。 織田はそれを確認してから言った。

織田　「終了十分前！」

その瞬間、まるで合図を受けたかの様に勇気がペンを初めて手に持って視線を紙に向けた。まるで何かに取り付かれた様に書き殴る勇気。それは織田が初めて目にした勇気の真剣で生き生きした姿だった。

教室の外の廊下

勇気はチャイムが鳴り廊下に出る。その後を追う様に織田が後から出て来る。

織田　「ああ志田！　ちょっと話があるんだ」

織田の声で勇気は振り向く。

勇気　「俺にですか？」

織田　「ああそうだよ。まず初めにこれ」

織田は教材と混ざり合った中から、村上から預かったノートを取りだして渡した。

勇気　「このノートは？」

織田　「村上先生は処分するって言っていたが、大切なノートなんだろう？」

勇気　「ええ」

織田　「取り返してあげた代わりにって訳じゃないんだが、見させてもらったよ。もし勝手に黙って見てしまった事を怒るのなら先生謝るよ」

勇気　「いえ別に構わないです。どうせ村上が言っていた様に他人から見れば落書きですから」

織田　「そんな事ないと思う。村上先生が何て言ったかは分からないけれど、先生はいい詩だと思ったよ。君の色々な気持ちが言葉で上手く表現されていてなかなか良かった」

勇気　「先生、あなたは僕の詩を理解できるんですか？」

勇気が織田に向けたその何かを求める眼差しは、教師の間で手の着けられない不良と呼ばれていた勇気では無く、誰よりも純粋な若干まだ十六歳の少年の目だった。

織田　「あ、ああ。全てと言う訳じゃないけれど、大体は理解してあげられたと思う」

　勇気はその言葉を聞くとまるで全てを見て来たかの様な目に成って一言言った。

勇気　「じゃあ先生はきっと幸せじゃ無いんですね」

織田　「えっ」

勇気　「これ本当にどうもありがとうございました」

　勇気は織田に深く一礼をして歩き出した。そして廊下に取り残された織田。織田はまるで全ての言葉を失ったかの様に立ち尽くす。言いたい事は山ほどあった、けれど何一つ口には出来なかった。ただ出来る事は、その全ての悲しみを背負って廊下を歩いて行く勇気を見続けていることだけだった。

詩織の家の前　（その日の放課後）

　勇気は今日も詩織にノートを届けに来た。

雅子　「ごめんね。今日もまだ病気の顔を見せたく無いんだって」

勇気　「いいんです。僕は全然構いません。本人が会いたくないのならそれでもいいんです。これ今日の授業を取ったノートです渡して下さい。 それじゃまた来ます」

　勇気は一礼をして歩き出した。

詩織の部屋

　詩織は窓に掛かっているカーテンの隙間から勇気の後ろ姿を見つめていた。そし

て頬には涙が一筋流れていた。

～僕は君の為に何もしてあげられないんだ　こんなに君を愛しているのに～

スタジオ

激しい音が更に激しくなって、そしてジャンという合図で曲は終わる。

祐司　「今日の純、何かすごく乗っているじゃん。なんかいい事でもあったのか？　まさか女でも出来たって言うんじゃないだろうな」

純　「女なんて腐るほどいるよ。まあなんて言うのかな、今度のフェスティバルに掛ける情熱とでも言うのかな、まあ俺が本気を出せばこんなもんチョロイってことだよ」

祐司　「おい、じゃあ頼むぞ本番で、練習頑張り過ぎて本番はダメでしたってことは無しだからな」

祐司の言ったその言葉に、一瞬純が動揺する。けれどみんながみんなを信じ合っていたこの場では、誰一人そんな純の動揺に気が付かない。

勇気　「（下を向いたまま）なあ純、昨日は悪かったな、あんな事言って」

純　「気にするなよ。お前に謝られると気持ちわりいんだから」

勇気　「（顔を上げて）ホント昨日の償いって訳じゃ無いが、本番は最高の歌を歌うよ」

純　「・・ああ・・。まあとにかく練習しようぜ。ＯＫシゲ、カウント取ってくれ」

茂樹　「よし！　じゃあ行くよ、ワン・ツー・スリー・フォー」

そして六畳程の小さな密室はリズムとサウンドとシャウトで埋め尽くされる。

スタジオの前（三日後、本番前日）

練習を早めに終わらせてスタジオから四人が出てくる。太陽はまだ西の空四十五度の所にあった。

祐司　「いよいよ明日だな」

純　「おおそうだな」

祐司　「なあ勇気、俺達これから飯食いに行くけど、お前はどうする？」

勇気　「あっわるいな。俺はちょっと行かなきゃ成らない所があるんだ。だからいいわ」

純　「あっごめん。俺も用事があるんだ。だから俺もパス」

祐司　「そうか、まあ今日はゆっくり休んでくれよ。明日はとうとう本番なんだからな、それと純、明日の本番終わったらのんびり飲みにでも行こうな」

純　「あ、ああ・・・」

勇気　「なあ純。明日は俺達の最高のステージを見せてやろうな」

純　「あ、ああ・・・」

　勇気と純は別々の方向に歩き出して行った。そして祐司と茂樹だけが残された。

祐司　「でも良かったな勇気と純がいい関係に戻って」

茂樹　「うんそうだね。でも何となく不自然過ぎる気がするんだ。勇気はいつもと余り変わっていないけど、あの純チャンがなんだか最近何かを偽っている様な感じがするんだ。でも今日は純チャンもいい顔をしてた」

祐司　「そうか、純がね。でもお前よく見ているな」

茂樹　「それはそうだよ。だって僕はドラムだよ。いつだってみんなの背中を見て叩いてきたんだから」

祐司　「そう言われればそうだな。でも何はともあれこれで明日は優勝間違いないな」

茂樹　「そうだね」

祐司　「じゃあ俺達も飯食いに行くか」

そう言って二人は繁華街のある方に歩き出した。

詩織の家の前

　勇気は明日のチケットを手に持ってドア越しに立っていた。そしてドアが開く。

雅子　「ごめんね、今日もやっぱり・・」

勇気　「あの、話だけでも出来ないんでしょうか？　どうしても今日伝えたい事があるんです」

雅子　「そうねえ・・・」

雅子は考えていた。それは深い溜め息となって現れた。

勇気　「おばさん、一つ聞いていいですか？　詩織さんは本当に病気なんですか？」

雅子は二階を気にしながらボソッと話し始めた。

雅子　「実はおばさんも分からないのよ。あの子五日くらい前から急に口をききたがらなく成ったのよ。心配でお医者さんに相談したのだけど、どうやら鬱病じゃないのかって、いつ何処で何があったかは分からないのでけれど、きっと何かのトラウマ（心身的傷害）が原因じゃないのかって、でも何を聞いても応えてくれなくて」

勇気　「そうだったんですか？」

雅子　「ねえ、志田君。あなた何か心あたりは無い？」

勇気　「五日前ですよね。確かあの日は僕の知っている限りではいつもと同じでした」

勇気は五日前の屋上の事を思い出した。・・［でも大丈夫だよ。私がいるから］

・

勇気　「おばさん、詩織さんに会わせて貰えないですか？　何があったかは分からないですが、きっと今彼女は僕が必要なんです。それに僕が彼女を守ってあげなければいけないんです」

雅子　「そうね。おばさんより、志田君の方が詩織の気持ちを理解してあげられるかもしれないからね。ただ一つだけ約束して欲しいの、無理なことだけはやめてね」

雅子は勇気を詩織の部屋の前まで案内をした。

雅子　「詩織、志田君がきたよ。だからドアを開けるね」

そしてドアを開けた。 部屋は六畳程の広さで、ドアからみて右側にベット、そしてその反対側に机、そしてその奥にカーテンを閉めきった窓があった。詩織はベットの端の壁に寄りかかって座っていた。

雅子　「じゃあ後は二人で。何かあったらおばさん下にいるから、じゃあね」

雅子が出ていってしまうとその沈黙は更に重いモノになった。けれど勇気はその雰囲気など気にもとめない様子で、窓に掛かったカーテンを開けて話を始めた。

勇気　「今まで俺はこの窓から差し込める光りを痛みと感じていた。そしてこの空間に存在する空気でさえ俺の自由を奪い、俺を苦しめるモノだと思っていた。けれどお前と出会ってからそれは違うと思った。この光りは明日への希望なんだ。そして誰にでもその光りを受ける権利がある。この空気だって俺達を苦しめるモノじゃなくて生きる為のモノなんだ。この狭い空間で俺達は闇と言う自由を作り出すんじゃ無くて、光りを求めなきゃいけないんだ。お前が教えてくれたんだ・・・」

詩織　「・・・・・」

勇気　「何があったかは分からないし、これからどうなって行くのかも分からない。この世の中には不確かなモノが多すぎるし、今までそれも不確かなモノだったから、だから俺はずっと不確かなモノだと思っていた。けれどお前と出会ってこの愛が確かなモノだと思った。だからお前に何があったとしてもそれを俺は全て受け止めてやる」

詩織は勇気のその言葉に堪えていたモノが溢れ出してきた。そして勇気にしがみつく様に呟いた。

詩織　「私・ワタシ、死ニタイ。死にたくないけど、シニタイ・・・・」

勇気はその小さく見える詩織を抱き締めながらささやいた。

勇気　「必死なんだね、頑張ってるんだね。でも今は死んじゃいけない。死ぬ事よりも真実を求める方が本当に苦しくて、難しい事なんだ。だからお前が俺を本当に愛していてくれるんだったら、死んじゃ行けないんだ。前から言っていたが、明日俺はヤングバンドフェスティバルに出る。もしそこで大賞を取る事が出来たらプロの道が待っているんだ。そうすれば逃げる事はしないで俺達の生活を築き上げる事が出来るんだ。だから明日俺は自分とお前の為に精一杯歌う。そして結果を出した暁には・・・。これ以上は今は何も言えないが、とにかく俺の生き様を明日、お前のその自分の目でしっかりと見て欲しい、それが俺が今お前にしてあげられる全てだ」

勇気は屋上で傷付いた自分の拳と心を抱き締めてくれた詩織を、今優しく抱き締

めた。そして窓から差し込む光りはそんな二人をいつまでも照らし続けていた。

～僕らは必死で居たいから　僕らは誰よりも真面目で居たいから　僕らはいつだって誰よりも真剣に生きていたいから　だから僕達は死にたくも成ってしまうんだ・・～

路地裏の空き地

純がルシードのメンバー太田信夫（１７）に胸ぐらを捕まれている。そしてその周りには二人の男が逃げ道を塞いでいた。

太田　「今更約束を果たせねえってどう言うことなんだ！」

純　「だから勘弁してくれよ。やっぱり裏切る事なんて俺には出来ないんだ」

太田　「じゃあ何か、勇気達は裏切れねえのに、俺達は裏切れるとでもいうのか？」

純　「言い訳はしねえ、とにかくそう言うことなんだ」

太田　「まあいい、けど一つだけ言っておく。あんな奴に付いて行くとお前後悔するぞ」

純　「さあどうかな。お前だって知っているはずだろ勇気の凄さを」

太田は一瞬、純を睨んで、そして突然笑い声をあげた。

太田　「面白い話だ。確かに昔の勇気は凄かった。中学の時には授業をボイコットして体育館に立て籠もり、全生徒を集めゲリラライブして全生徒のカリスマ的存在に成った。その時は誰もが新しい時代を感じたよ。けれどあいつが求めたのは結局下らない自由さ。だから今に成ってもあいつは暴力しか脳が無いただの反逆者じゃないか」

純　「けれどお前はそんな勇気の存在を恐れている、だからギターリストの俺を裏切らせて歌えなくしようとしたんだろ。違うか？」

太田　「分かった様な事を言うな！　あんな奴何とも思っていねえよ。ライブハウスの動員数見れば一目瞭然じゃないか！」

純　「ああ確かに今のルシードは凄いよ。女にはもてるしルックスだって今風だからな、それに歌詞だってバカな高校生どもには理解出来ない横文字を腐るほど使って

いて聞こえはいいよ。けど結局それはただの流行りもんなだけで、何一つ真実なんて語っていねえじゃねえか。どうせお前らは後何ヶ月かの命だよ」

太田　「ふん負け犬どもが、お前らは野良犬みたいに牙向けて吠えてらいいんだ」

純　「（呟くように）負け犬か・・・」

　純は負け犬かと呟いてから笑った。

太田　「何が可笑しい？　負け犬と言われてそんなに面白いのか？」

純　「いやなに、今分かっただけさ。負け犬の意味が」

太田　「そうかやっと分かったか、お前ら負け犬の意味が」

　純は下を向いたままゆっくり首を振った。

純　「俺達は負け犬じゃ無い。いや、俺は負け犬だったかもしれない。けれど少なくとも勇気、あいつは負け犬じゃ無い！　負け犬って言うのは勝負に負けた奴や、結果を出せなかった奴の事を言うんじゃなくて、お前らみたいにまともな勝負すら出来ない奴らのことを言うんだ！」

太田　「何だと！」

　太田は男二人に合図を出す。男二人は指をポキポキ成らして純を囲む。

純　「おもしれえ、やってやるよ」

太田　「言っておくが、こいつらはボクシングをやっているんだ。まあこれで明日は仮病を使う必要は無くなったって事よ。だって本当に怪我をするんだからな」

　太田は笑いながら去って行った。

勇気の家の前（その日の夜）

　玄関から勇気が出てくる。門の前には純がボロボロの体で立っていた。

勇気　「い、一体どうしたんその傷」

　勇気は純のボロボロの姿を見て駆け寄る。

純　「いや、俺が悪いんだ。ホント勇気に謝らなきゃならないんだ。勇気、本当にごめんな。俺、お前達を裏切ろうとしてたんだよ。俺は・・・・」

純は今までの経緯〔いきさつ〕を話した。勇気はただ黙ってそれを聞いていた。

勇気　「わかった。お前の気持ちは良く分かった」

純　「許してくれるか？」

勇気　「許すも何も俺達仲間だろ。仲間には裏切りなんて無いんだよ。それより明日は大丈夫なのか？」

純　「ああ指だけは必死に守ったよ。まあ上手くは弾けないかもしれないが、精一杯の事はやる。俺の今出来る最高のプレイをするよ」

勇気　「そっか。じゃあ今日の所は家に帰って休め。後は俺が何とかする」

純　「なんとかするって、お前まさか？」

勇気は黙っている。

純　「なあお前には後が無いんだぞ。まあ勇気の事だからあいつらに負ける事は無いけど、もし事が大きくなって警察にでも捕まったりしたら、今度こそ鑑別もしくは少年院に行くかもしれないんだぞ」

勇気は黙っていたが、純の視線を受けて呟くように言う。

勇気　「俺はバカだからさ、今出来ることを精一杯やるしか脳が無いんだ。俺が俺である為に許せない事を許す訳には行かないんだ。ただそれだけなんだ。じゃあ明日な」

勇気はそれだけを言って後は何も聞かないとでも言うかの様に走り出した。

純　「勇気！　おい待ってくれよ・・・」

勇気は走る。何処に向かうかも分からないままに・・・・。

～僕は本当に馬鹿なんです　だからあなたが描くその夢を叶えてあげられないかもしれません　僕は本当に弱い人間なんです　だからあなたの事守ってあげられないかもしれません　僕は本当に不器用な生き方しか出来ないんです　だからあなたの事幸せに出来ないかもしれません　だけど僕はあなたを愛しています　そして何よりも大切に思っています　この命を賭ける事も出来るんです　こんな僕をあなたは信じてくれますか？　こんな僕をあなたは誰よりも愛してくれます

か？・・・～

祐司の家

祐司は電話に対して怒鳴っていた。そしてその相手は純だった。

祐司「お前何でそんな事を勇気に話したんだ！　お前だって勇気の性格知っているだろ！　あいつは友情とか愛情に対して純粋で真っ直ぐ過ぎるんだよ、だから仕返しに行くのは当たり前だろ！」

純　「ごめん。ただ俺は明日のステージの前に謝って置きたかったんだ、だから」

祐司「まあそれはもういい。とにかく俺は今から勇気を探しに行ってくる。お前はお前で心当たりのある所を探せよ」

祐司はそう言うと電話を切った。

織田の家

織田は片山と電話でやり取りをしていた。

片山「確かこの前の詩人生徒の名前は志田勇気だったよな」

織田「ああ志田勇気だ」

片山「そうか、じゃあ間違いじゃなさそうだな」

織田「間違いじゃないってどう言うことなんだ」

片山「いやなに、偶然と言うか運命というそう言うモノが存在するって事だ。実はうちの音楽事務所協賛で明日ヤングバンドフェスティバルと言うイベントをする事に成っていて、うちの事務所から代表で俺が審査員をする事に成ったんだ。それで出場バンドの資料を見ていた時にたまたま志田勇気と言うこの前の詩人と同一同名の名前を発見して気に成って調べて見たんだ。デモテープの歌詞と在籍校からすると間違い無いと判断したけど一応確認しておきたくてな」

織田「明日か・・。なあその何とかフェスティバルに俺も行っても構わないか？」

片山「別に構わないさ、俺の名前を出してくれれば特等席を用意しておくよ」

織田「そうかありがとう」

片山　「あっそうだ、所で他の詩は手に入ったか？」

織田　「そうそう、別の詩の事はまだ聞いていないが作りたての最新の詩なら一つある」

片山　「そうかすぐにでも見たいな」

織田　「分かった今すぐＦＡＸするよ」

織田は電話を切った。

片山の家

片山は机の前に座ってコーヒーを片手に、送られて来たＦＡＸに目を通していた。そして全てを読み終わった時に一言呟いた。

片山　「やっぱりそうだったのか」

路地の片隅

路地の片隅で勇気は戦っていた。殴られ、殴り、羽交い締めになり、それを振り払う、そしてまた殴り、殴られ・・・・。

別の路地で勇気を探している祐司、茂樹、純。そして自分の部屋で必死に震える自分の心と体と戦っている詩織（その映像にオーバーラップしてＦＡＸで送られてきた詩が流れる）

～この傷みを感じる事の出来る心は僕の誇りです　この大切なモノを守る事の出来る二つの腕は僕の宝です　この君のことを見守り続けられるこの目は僕の生き甲斐です　そして君は僕の生きる糧なんです　だからどうかお願いです　僕を踏み台にして構わないから君は必ず上に行って下さい　そして一歩一歩大切に精一杯生きて下さい　だって僕はその為に存在しているのだから・・・・・～

駅前

純と茂樹が肩で息をして立っていた。そこにそれ以上に疲れた祐司が現れる。

祐司　「勇気は居たか？」

純　「いや俺が行った時はもう既に呼び出された後だった」

茂樹　「こっちも行きそうな所は一通り」

祐司　「それで勇気の行きそうな所は他に」

　純は首を振った。

祐司　「そうか・・・」

純　「祐司、本当にごめんな」

祐司　「その事はもういい忘れろ、勇気のことだ明日は絶対に来るよ。だから俺達の出来る事は精一杯の演奏であいつを迎え入れるだけだ。だから明日の為にもとりあえず今日は勇気が明日無事で来る事を信じて家に帰って寝よう」

茂樹　「そうだね」

ステージ会場（翌日）

　ヤングバンドフェスティバルの会場は若者の熱気に包まれていた。そしてステージ上では司会者がその若者の熱気を更に盛り上げていた。

司会　「今年もヤングバンドフェスティバルの季節がやって来ました。今年は去年惜しくも準優勝だったルシードが急遽メンバーの都合により欠場ですが、それに変わるビジュアル系バンドシャレード、そして今年人気急上昇したボンバーズ、その他・・」

会場控え室

　純が心配そうにソワソワしていた。

純　「なあ本当に勇気は来るのかな？」

勇気　「ああ多分な」

純　「多分って、もう始まっているんだぜ」

　ステージ上の司会者のさあエントリーナンバー一番ボンバーズの登場ですと言う声と、そしてボンバーズの演奏が聞こえ始めた。

祐司　「まあとにかく勇気を信じるしかないよ。なんだかんだ言ったって俺達のバンドは勇気の代わりを出来る奴は居ないんだから」

純　「・・・・」

観客席

織田は一人客席に座っていた。そして頭の中では夕べ片山にＦＡＸを送った後、もう一度片山から連絡を受けていた時の事を思い出していた。（回想シーン）

片山　「分かったよ、彼が一人で全てを背負って何処に向かっているのか」

織田　「えっ、一体何処なんだ」

片山　「終わりさ」

織田　「終わり？」

片山　「そう、終わり。死とか破滅とかそう言う言葉では表せられない場所。そう彼が求めたパーフェクトワールド、いわばこの規律社会が作り出したこの世の果てだ」

織田　「この世の果て？　なあその事を本人は？」

片山　「多分書いている本人もまさか自分がそんな所に向かっているなんて思ってもいないだろう。けれど俺も色々な詩人を見てきたがまず間違い無い、このまま行けばきっと全てが終わるだろう」

織田　「なあそれを俺達大人が何とかしてやる事は出来ないのか？」

片山　「出来ない、出来やしない。考えても見ろ、俺達は年齢こそ彼の倍は生きてはいるが、背負って来た悲しみや苦しみなんてきっと彼の半分にも満ちやしないんだ」

片山にそう言われて織田は初めて勇気のあの〔じゃあ先生はきっと幸せじゃ無いんですね〕と言う言葉の意味、そしてあの時のまるで全てを見てきたかの様な目の意味が分かった様な気がした。織田は救いを求める様に片山に聞いた。

織田　「なあそのパーフェクトワールドは、勇気本人にとって幸せな場所なのかな」

片山　「さあそれはやはり今の俺達には分からないな。けれど一つだけ言える事は時代の終わりは、新しい時代の始まりの一歩でもあると言うことだけだ。だから彼本人がその事に気付けばあるいは・・」

織田がそこまで思い出した時に会場の雰囲気が変わった。その雰囲気は新しい時代を背負う若者の波と、古い時代を棄てようとする若者の波とがぶつかり合う独特な雰囲気だった。そして司会者の声はスピーカーから新しい時代の第一歩を告げ

た。

司会　「次はいよいよあの若者のカリスマ的存在、志田勇気率いるアウト・サイダー！！」

　歓声は一層高まる。しかしアウト・サイダーはなかなか現れない。スピーカーからは少々お待ち下さいと言うメッセージが流れる。

舞台裏

　係り員がアウト・サイダーのメンバーに詰め寄る。

係り　「一体どうしたんだ？　君たちの番だよ。早くステージに！」

祐司　「済みません、まだメンバーが揃って居ないんです。もう少し時間をくれませんか」

係り　「いやそう言われても時間がかなりおしているからな。残念だけど棄権か残ったメンバーだけで演奏して貰えないかな、まあルシードも棄権した事だし、棄権の方が」

　三人は顔を見合わせた。けれど答えは決まっていた。

三人　「出場します！」

ステージ

　三人が現れる。準リーダーの祐司がマイクに向かって言う。

祐司　「初めにみんなに謝らなくては成らない事があります。うちのメインボーカリストの志田勇気が都合の為今日は出られないのです」

　一斉にヤジが飛ぶ。困った祐司に変わって純がマイクを持った。

純　「みんな聞いてくれ。俺達もお前らと気持ちは一緒なんだ。正直言って棄権も考えた、けれど俺達は勇気と言う一人の仲間の為にここで棄権する訳にはいかないんだ」

　けれどヤジは止まらない。仕方なく三人が演奏をしようとしたその時だった。客席の一番後ろの入り口に傷だらけの勇気は現れた。そしてその横には勇気を必死に支えるように詩織が立っていた。

　勇気は一歩一歩歩く、ただ目の前に引かれたステージへの自分の道を。そこには自分を支えてくれる詩織が居て、ステージで待っている祐司、茂樹、純と言う仲間

が居て、勇気、勇気とエールを送るみんなが居る。勇気は傷付いた体にむち打って走り出す。ただ目の前に引かれた新しい時代への第一歩を・・・。

そして勇気がステージに立つと今までに感じたことの無いような熱気に包まれた。

　～例えこの先に限りない不幸しか僕を待ち受けていなかったとしても　そしてこの先に絶望と言う悲しみしか僕を待ち受けていなかったとしても　僕は必死に夢を追おう　そして激しく人を愛そう　もしも人が手に入れる事の出来るものが限られていたとしても　例えもしもそれで命を落とすことがあったとしても　僕は限りなくそれを求めよう　そして限りなく純粋に今を生きよう

だって今の僕らに出来る事なんて他には何も無いのだから・・・・・～完～